

肖像畫作法座談

黒田清輝君

専門が幾つにも分れて居る

あつらゑかき

單に油畫家と云ふても、専門が幾つにも分れて居る、花を重に畫く人、風景を重に畫く人と云ふやうに幾つにも區別がある、風景の内でも海とか、山林とか又は市街とか、夫々更に小區分がある、人物畫に就いても然りで、風俗畫を重にやるもあれば、歴史畫を重にするもあり、又理想を表はすを専らにして居るものもある、動物畫にしても猫を畫くに巧なるものもあれば、専ら犬を畫くに卓絶して居るものもある、

肖像畫亦専門なる乎

肖像畫も亦人物畫の内の一専門と稱へても善い位のものであらう、併し人物畫をやる位のもものは、皆肖像畫をかくが、その内でも肖像畫を巧にして、自ら専門家の如き傾きをなせる畫家が歐洲にも少なくないと思はれる、昔から此傾向はあつたので、殊に濁逸のボルペインの如きは盛に肖像畫を畫いた人である、

私はその故郷のバールやその他の博物館で此人の畫いた直筆の肖像畫をも見、又、寫眞でも見て知つて居る、人の性格を表はす點に於ては、此人位巧に畫いた人は古來少ないだらうと思はれる、繪具の使ひ方、色の出し具合に於ては名家も蓋し少なくあるまいが、形態の正格なる事、其人の性格を遺憾なく表はして居る點、而かも其運筆の上に一種の氣高さを帶びて居る事などは、此人の右に出づる畫家は至つて少ないだらう、

自畫像家たるレンブラント

レンブラントなども随分多くの肖像畫を畫いた人で、殊に自畫像を盛に畫いた、何處の博物館へ往つて見ても此人の自畫像なきは殆どなしと云つてもよい有様、而して其光線の取り様、色の調

和、運筆の具合など實に巧なもので、其濃淡のかき分けの如きは、其後の歐羅巴全部の繪畫に及ぼしたる影響は頗ぶる多大なものであつた、單に肖像畫而已ならず、宗教的風俗畫又は純粹の風俗畫など澤山の名作が遺つて居る、デ肖像畫の如きは此人に取つては殆ど端くれの仕事の如きものである、

その他の肖像畫家 私の知つて居る狭い範圍内で例を擧ぐれば、佛のボンナーの如き、獨のレンバツクの如きは先づ肖像畫の専門家であらう。此の人等でも前述べた通り、他のものも畫くが主として肖像畫を畫いたのである、ボンナーなどの畫いたものは随分他に名作がある、而して佛蘭西の大統領にしてもその他の貴顯紳士にしても、ボンナーの肖像畫でなければ駄目だと云ふ位に、此人は肖像畫の大家である、レンバツクは、殊に面部の書き表はし方は、簡單で而も至れり盡せりと云ふ點に於ては實に巧である、一千九百年巴里の博覽會では名譽賞牌を得たと思ふ、

似た許が肖像畫ではない 勿論似ると云ふ事が肖像畫の主要の條件である、例令ば私の顔を書いて、それか他の人に似て居るとか、又は幾らか似て居ると云ふ様では肖像畫とは云へない、而し似せる計が肖像畫の能事ではない、尤も似させる伎倆が達して居らなければ駄目だが、一ヶの畫としても趣味を有するやうにしなければならぬ、似せる事にしても、觀察の緻密、輪廓の取り方、性格の表 彰の取り方等に就て、上中下がある、人には各自獨得の動作姿勢と云ふものがある、若し此等を無視したならば決して面白い肖像畫は出来ない、人に依つて反身の人もある、右の肩を特に張る癖の人もあり、又話をする時鼻孔や口を横に廣げる人もある、此等の動作を極端に畫けばボンチ畫になつて仕舞ふが、適度に恣ういふ癖も見取ると云ふとが必要である、

寫眞に依れる肖像畫

今日迄肖像畫と云へば十中の八九までは寫眞に依つて畫かれたものだ、寫眞そのものがいゝ加減なもので決して機械のまゝに寫されて居らない、機械で寫した上、光線や骨格などに一向頓着しないで修正する、唯見て美しければよいのだ、トンダ化物が出来て仕舞ふ、寫される人も滑らかで美しければ安心して居る「誰でも寫眞を取る時には變な氣持がするものだ、機械の前に立つ時寫される人の感覺が平常の感覺と異なる、デすからその人に似ない事がある、恁云ふ寫眞を土臺として作るから到底肖像畫らしいものの出来る筈がない、是に加ふるに伎倆の拙劣を以てして、且つ注文者の無理な望みが加はる、かゝるが故に肖像畫そのものとして面白いものは決して出来ない、

將來の肖像畫

我邦にても漸く繪畫に興味を持つ人が増加し來て、或は畫家の汚き畫室に車を止める貴顯も

出來て參みらうし、そうなれば肖像畫も必ずや面白いものが出來て來るだらう、夫に機械の前に立つと、畫家の前に坐するとは、寫される人の氣持が丸で違ふ、肖像畫と云ふものは決して數分間に出来るものにあらず、多くの時日を費やすものだ、その間には寫される人と寫す人との意志の交換も出來やうし、畫家も依頼者の外形に現はれた癖を充分に觀取して、畫面に書き表はす事が出來やうと思ふ、恁して行けば纏て歐羅巴並にはなれるし、肖像畫としても、繪畫としても將た又美術品としても人に見せ得るやうなものが出来る、今日迄の肖像畫は多くは唯某に似て居ると云ふ而已にして、立派な美術品として、人に趣味を持たしむる程のものは至つて少ない、今日迄の私の友人にしろ又先輩にしろ多くは、肖像の注文を受けた時には、唯寫眞の上塗をするやうな事をして居つた、彼等自らも美術品を作ると云ふ自惚を以て畫かない、是は洵に事情止むを得ない事で、唯肖像畫なりでは決して

發達を遂げることが出来まい、風俗畫なり、動物畫なり、その他の繪畫に費やす丈の骨折をなして充分の趣味を抱て畫くにあらざれば、決して趣きのある面白いものは出来まい、他の人物畫にしても人物が多數居る場合などは畫くに困難でもあるし、出来上つた上に頗る立派であるが、肖像畫に至つては多くて兩三人、大抵は全身若くは半身の一人畫で、如何にも詰らぬ、併し實際に骨折つて見ると困難は同一である、否却て簡單なるもの丈に尙更六ヶ敷い、唯將來に望む所は世人も少しく面目を一變して、唯寫眞の如き肖像畫で満足せず、繪畫としても趣味のある肖像畫を欲すると云ふやうに致したい、全く見ず知らずの人の肖像畫でも自分の家に掛けて置いて趣味津津たるものゝ出来ることを希望する、で他日は此要求に應ずる肖像畫が生まれ出づると思ふ。(文責在記者)

『成功』三六 明治四一年五月

黒田は生涯のうちに数多くの肖像画を手がけているが、本文献はその理念を詳しく述べており興味深い。「美術教育の方針」(本書六五～八二頁)の注釈で引いた「故外山博士と黒田清輝氏」にも、肖像写真の使用を拒んだ黒田の求めに応じ、外山正一がモデルをつとめるべく美術学校の黒田のもとへ日参したエピソードが語られており、言行一致した黒田の姿勢がうかがえる。